

◆ ありがとう ◆

今年も残りわずかとなった。慌ただしく年が暮れていく。学校も一つの区切りを迎える。

去年の冬休み前には、子どもたちにどのようなことを話していたのだろうと今年のあいさつ文を振り返ってみる。

「1年中、コロナに翻弄された年が終わります。学校も様々な対応を余儀なくされました。皆さんにも様々な場面でご迷惑をおかけしました。・・・」

今年も同じような日々が続いた。8月には県独自の「非常事態宣言」が発出され、学校は再度の臨時休業となり、子どもたちの声が再び聞こえなくなった。

繰り返し報道される感染者数や重症者数…。 “いのち”のことにどうしても向き合わざるを得なくなった状況の中、2年ぶりに非公開で開催した「藤朋祭（文化祭）」で、『いのちの歌』（作詞：Miyabi、作曲：村松崇継）を歌わせてもらった。歌詞の最後に感謝の気持ちが綴られている。“いのち”の尊さとともに、感謝の心を伝えたかった。



この苦しい時期、様々な皆さんからたくさんのご支援をいただいた。本当にありがたかった。お一人お一人の皆さんの顔が脳裏に浮かぶ。

生徒を応援するために訪れた各部活動の会場での保護者の皆さんの温かな笑顔とお声がけには逆に私が励まされた。本校の国際教育を外部から支えてくださったMさんは、オーストラリアでの海外研修ができないもどかしさについて触れ、学校のことを本当に心配してくださった。茨城南青年会議所の皆さんには、探究活動をとおして地域との関わりを学ばせていただいていたが、「逆に、私たちが学ばせてもらいました。」とお言葉を頂戴した。お世話になっている同窓会、後援会の皆さんからは、ご心配とともに温かなご支援をいただいた。その他、多くの皆さんの励まし、お心遣いをいただいた。本当にありがとうございます。

今はジャズピアニストとしてニューヨークで活躍している大江千里さんの作品に、『ありがとう』というものがある。しっとりとした優しいバラード。

歌詞にある「オリンピックがあった・・・今年に・・・」というようなフレーズも含めて、今年最後に感謝の気持ちを伝えるにはぴったりだと思い紹介しました。ご一聴あれ！

多くの皆さんのお力添えをいただき、本校の教育活動を進めることができます。今年一年、本当にありがとうございました。引き続き、来年もどうぞよろしくお願いいたします。